

仮称）都筑自然公園の計画時には

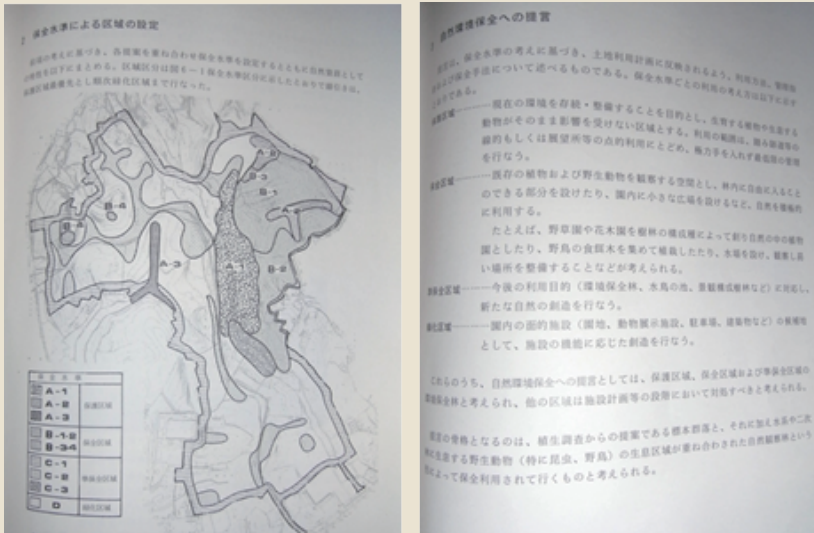
1984 年（昭和 59 年）：都市計画決定（仮称「都筑自然公園」）

1999 年（平成 11 年）：一部開園（横浜動物の森公園）

2009 年（平成 21 年）：開国博 Y150 開催（ヒルサイドエリア）

2015 年（平成 27 年）：動物園エリア全面開園

都筑自然公園植生等現況調査報告書（1984）



都筑自然公園植物公園部分基本構想案（1996）



都市緑化よこはまフェア里山ガーデンを経て

テーマ：横浜の森を楽しむ里山ガーデン

サブテーマ：豊かな横浜の緑を楽しむライフスタイル

- ① みどりアップの成果：守った横浜の緑
- ② 横浜の里山の魅力、楽しみ方
- ③ 横浜市民の新しい緑のライフスタイル
- ④ 低炭素社会、生物多様性の主流化を発信

評価 1ha の森を削ったことや、園芸種の植栽を多用していることは郊外部の里山環境、生物多様性を保全しているとは言えない。みどりアップ計画や生物多様性地域戦略に反している。

●花で彩る大花壇

- ・既存地形の斜面を活かし、横浜市内産の園芸種を使用した市内最大級（約 1ha）の大花壇。

課題

- ◎ゲンジボタルのいる小水路の集水域。この場所は、農薬・肥料等の使用をしないようにしてほしい。
- ◎高齢者が圧倒的に多い。回遊性がありすぎ、さらに通行止めになったりして戻れず不満が聞かれる。

●生物多様性ゾーン

- ・日大による田んぼ、湿地化により希少植物を保全してきた場所。

課題

- ◎谷戸の源頭部にあたり、本来は希少植物を下流域まで拡大させるべく、シードバンクとしての役割がある。そのため、下流部の谷戸本体と一体として考えるべき。
- ◎南側の林縁にいたクツワムシ（県 RDB 要注意種）が激減。

●花の里山ゾーン

- ・もともと里山林として利用されていた場所に、高密度で低木類が植栽された。
- ・南側のオオシマザクラ、ヤマザクラを活かした間伐はよかった。

課題

- ◎園芸種が高密度過ぎる。植生に合わないものも見受けられる。
- ◎里山管理技術を継承し、薪炭林および草土手の風景を再生させる。
- ◎秋の七草、スプリングエフェメラルに代表される草本を復活させる。
- ◎土地利用の履歴を景観とともに紹介する工夫。
- ◎林縁に生息していたクツワムシが激減。

●谷戸の花絨毯

- ・湿地の一部復元によりミズニラ（県 RDB 絶滅危惧 I B 類）が発生。

課題

- ◎本来、ノハナショウブを復活してほしいだったが、園芸種ばかりで残念。
- ◎湿地は管理不十分で景観等もよくない。
- ◎生物多様性ゾーンに隣接して菜の花畑にするのはおかしい。ビオトープとして再生すべき（水田でもよいのでは）。土手の菜の花も不自然。

植物公園 基本構想の提案

過去に考えられていたこと

- ・都筑自然公園植生等現況調査報告書（1984）の提言
- ・都筑自然公園植物公園部分基本構想案（1996）

➡ まずこの 2 つのプロセスと成果について、どのように検討し、反映してきたのか明確にすること。

ビジョン

大都市ヨコハマで実現する、人と自然の営みの歴史を
まるごと体感できる植物公園

ミッション

1 横浜北部の里山の生物多様性を保全・再生する

- ◆ 谷戸を湿地として再生
（ゲンジボタル、ヘイケボタル、ツチガエル等）
 - ◆ 里山の植物を再生
（クマガイソウ、ノハナショウブ、エビネ、コオニユリなど）
 - ◆ 開港と関係の深い植物の野外展示
（ヤマユリ、クワなど）
- 【象徴】 オオムラサキ・ツチガエルを復活させる
ズーラシア開発時に移植した植物を復活させる

※繁殖センターとの連携（両生類、昆虫類）
※里山林の再生技術の研修の場（造園会社、森づくり
ボランティア等）

2 現代生活とのつながり（ライフスタイル）を創造する

- ◆ 高齢化・健康づくりに対応した森林セラピー
 - ◆ 園路をチップなどで足にやさしく。
 - ◆ 親子で学ぶ、楽しむ空間
- ※便宜施設の設置、間伐材活用、横浜野菜使用のカフェ

3 谷戸環境の魅力を市民とともに共有・発信する

- ◆ 基礎データの収集（調査・研究）
- ◆ 質の高いインタープリテーションの実現
- ◆ 国際観光都市として多言語対応

※環境科学研究所、繁殖センター等の専門家との連携

上記 **1 2 3** を統括できる仕組み（組織）が必要